

9月 20日 (日) 列王下 12章	「ヨアシュは、祭司ヨヤダの教えを受けて、その生涯を通じて主の目にかなう正しいことを行った」(3節)。七歳で就位したヨアシュ王は祭司ヨヤダの教えに従って、主に従う信仰を学んだ。私たちは自分一人の力で信仰を貫くことはできない。一緒に聖書を学ぶ友、祈りを合わせる友、賛美を共にささげる信仰の友を必要としている。主の教会の交わりに感謝して。
21日 (月) 列王下 13章	「しかし、主はアブラハム、イサク、ヤコブと結んだ契約のゆえに、彼らを恵み、憐れみ、御顔を向け、彼らを滅ぼそうとはされず・・・」(23節)。北王国はその最初から「金の子牛礼拝」を止めようとしなかったが、主なる神は彼らを「恵み、憐れみ、御顔を向け」続けた。愚かな王たちの背後にある、主の深い忍耐と慈しみの祈り。ここに聖書の歴史の「要」がある。
22日 (火) 列王下 14章	「しかし(ユダの王アマツヤは)、モーセの律法の書に記されているところに従い、殺害者の子供たちは殺さなかった」(6節)。歴代のほとんどの王がモーセの律法を軽んじ、聞き従おうとしない中で、律法の神の御心に忠実に従うことがどれだけ勇気を要することだったことか。私たちも今日「主の目にかなう正しいこと」を追い求める信仰をいただきたい。
23日 (水) 列王下 15章	「ユダの王、アマツヤの子アザルヤが王となった。彼は十六歳で王となり、五十二年間エルサレムで王位にあった」(1-2節)。アザルヤ(ウジヤ)王は歴代の王たちの中で最長期間王位にあった。しかし就位期間の長さが問題ではない。列王記の関心は「主の目にかなうこと」を行うかどうかにある。人からの栄誉ではなく、主の前の忠実を選ぶ私たちでありたい。

24日 (木) 列王下 16章	「祭司ウリヤはアハズ王がダマスコから送って来たもの(見取り図と説明書)そっくりに祭壇を築いた」(11節)。南王国のアハズ王は北王国の繁栄を見て、彼らが拝む異教の神の祭壇を見にダマスコへ行き、祭司ウリヤに指示を送った。国の土台を何に据えるか、王が最も心尽くべき課題においてアハズ王は大きな過ちを犯したのだ。私たちの国はどうだろうか。
25日 (金) 列王下 17章	「しかし彼らは聞き従うことなく、自分たちの神、主を信じようとしなかった先祖たちと同じように、かたくなであった」(14節)。列王記の王たちのほとんどが主なる神に聞き従うことなく、信じようとしなかった。この愚かな歴史を後世に残すことで、列王記は、これを読む私たちに「国の土台に据えるべき信仰をあなたはどうか考えるか？」と問いかけている。
26日 (土) 列王下 18章	「彼(ヒザキヤ)はイスラエルの神、主に依り頼んだ」(5節)「彼は主を固く信頼し、主に背いて離れ去ることなく、主がモーセに授けられた戒めを守った」(6節)。南王国の最後に線香花火のように輝いた王、それがヒゼキヤである。彼自身は「強い王」ではない。ただ神の前に涙を流し祈る王であった。神の前に弱い自分を認めること。そこに信仰の原点がある。
27日 (日) 列王下 19章	「見よ、わたしは彼の中に霊を送り、彼がうわさを聞いて自分の地に引き返すようにする。彼はその地で剣にかけられて倒される」(7節)。これはヒゼキヤ王の家臣たちに語ったイザヤの言葉。アッシリアの王センナケリブがユダの町に攻め上ってきた時、王の側近ラブ・シャケの威圧的な脅しの言葉に対してイザヤの預言が成就する。主はユダの民を守られた。